

開化の良人

芥川龍之介

青空文庫

いつぞや上野うえのの博物館で、明治初期の文明に関する展覧会が開かれていた時の事である。ある曇った日の午後、私はその展覧会わたくしの各室を一々町ていねい疇に見て歩いて、ようやく当時の版画はんがが陳列されている、最後の一室へはいった時、その硝子戸棚ガラスとだなの前へ立つて、古ぼけた何枚かの銅版画を眺めている一人の紳士しんしが眼にはいなかった。紳士は背のすらつとした、どこか花車きやしゃな所のある老人で、折目の正しい黒ずくめの洋服に、上品な山高帽やまたかぼうをかぶっていた。私はこの姿を一目見ると、すぐにそれが四五日前に、ある会合の席上で紹介された本多子爵ほんだししやくだと云う事に気がついた。が、近づきになって間まもない私も、子爵の交際嫌いな性質は、以前からよ

く承知していたから、咄嗟の間、側へ行つて挨拶したものだとうかを決しかねた。すると本多子爵は、私の足音が耳にはいつたものと見えて、徐にこちらを振返つたが、やがてその半白な髭におもむろおお掩われた唇に、ちらりと微笑の影が動くと、心もち山高帽を持ち上げながら、「やあ」と柔やさしい声で会えしやく釈やくをした。私はかすかな心の寛くつろぎを感じて、無言のまま、叮ていねい嚀ねいにその会釈を返しながら、そつと子爵の側へ歩を移した。

本多子爵は壮年時代の美貌が、まだ暮くれがた方の光の如く肉の落ちた顔のどこかに、漂ただよっている種類の人であつた。が、同時にまたその顔には、貴族階級には珍らしい、心の底にある苦勞の反映が、もの思わしげな陰影を落していた。私は先せんだつ達だつても今日の通り、

唯一色の黒の中にものう懶い光を放っている、大きな真珠しんじゆのネクタイピンを、子爵その人の心のように眺めたと云う記憶があつた。：

「どうです、この銅版画は。築地つきじ居留地の図——ですか。図どりが中々巧妙じやありませんか。その上明暗も相当に面白く出来ているようです。」

子爵は小声でこう云いながら、細い杖の銀の握りで、硝子戸棚の中の絵をさし示した。わたくしなす私は頷いた。きくら雲母のような波を刻んでいゝる東京湾、いろいろな旗をひるがえ翻した蒸気船、往來を歩いて行く西洋の男女の姿、それから洋館の空に枝をのばしている、ひろしげ広重めいた松の立木——そこには取材と手法とに共通した、一種の和洋折せ

つちゆう

衷つちゆうが、明治初期の芸術に特有な、美しい調和を示していた。

この調和はそれ以来、永久に我々の芸術から失われた。いや、我々が生活する東京からも失われた。私が再びうなず領うなずきながら、この築つ地居留地きじの図は、独り銅版画として興味があるばかりでなく、牡ぼ丹たんに唐獅子かとうしの絵を描いた相乗あいのりの人力車じんりきしやや、硝子取りガラスビの芸者の写真かいかが開化かいかを誇り合つた時代を思い出させるので、一層なつか懐なつかしみがあると云つた。子爵はやはり微笑を浮べながら、私の言ことばを聞いていたが、静にその硝子戸棚の前を去つて、隣のそれに並べてある大蘇芳年たいそよしとしの浮世絵の方へ、ゆつくりした歩調で歩みよると、「じゃこの芳年よしとしをごらんなさい。洋服を着た菊五郎と銀杏返いちようがえしの半四郎とが、火入りひいの月の下で愁嘆場しゅうたんばを出している所です。

これを見ると一層あの時代が、——あの江戸とも東京ともつかない、夜と昼とを一つにしたような時代が、ありありと眼の前に浮んで来るようじゃありませんか。」

私は本多子爵ほんだが、今でこそ交際嫌いで通っているが、その頃は洋行帰りの才子さいしとして、官界のみならず民間にも、しばしば声名を謳うたわれたと云う噂の端はしも聞いていた。だから今、この人氣ひとけの少い陳列室で、硝子戸棚の中にある当時の版面に囲まれながら、こう云う子爵の言ことばを耳にするのは、元より当然すぎるほど、ふさわしく思われる事であった。が、一方ではまたその当然すぎる事が、多少の反撥はんぱつを心に与えたので、私は子爵の言ことばが終ると共に、話題を当時から引離して、一般的な浮世絵の発達へ運ぼうと思つて

いた。しかし本多子爵は更に杖の銀の握りで、芳年の浮世絵をひと一つひとつつさし示しながら、相あいかわらず不変低い声で、

「殊わたしに私などはこう云う版画を眺めていると、三四十まえ年前のあの時代が、まだ昨日きのうのような心もちがして、今でも新聞をひろげて見たら、鹿鳴館ろくめいかんの舞踏会の記事が出ていそうな気がするのです。実を云うとさつきこの陳列室へはいつた時から、もう私はあの時代の人間がみんなまた生き返って、我々の眼にこそ見えないが、そこにもここにも歩いている。——そうしてその幽ゆうれい霊が時々我々の耳へ口をつけて、そつと昔の話を囁いてくれる。——そんな怪しげな考えがどうしても念頭を離れないのです。殊に今の洋服を着た菊五郎などは、余りよく私の友だちに似ているので、あの

似顔絵にがおえの前に立った時は、ほとんど久闊きゆうかつを叙じよしたいくらい、半ば気味の悪い懐しささえ感じました。どうです。御嫌おいやでなかつたら、その友だちの話でも聞いて頂くとしましょうか。」

本多子爵はわざと眼を外そらせながら、私の気をかねるように、落着かない調子でこう云った。私は先達せんだつて子爵と会った時に、紹介の労を執とった私の友人が、「この男は小説家ですから、何か面白い話があつた時には、聞かせてやって下さい。」と頼んだのを思い出した。また、それが無いにしても、その時にはもう私も、いつか子爵の懐古的な詠歎えいたんに釣つりこまれて、出来るなら今にも子爵と二人で、過去の霧の中に隠れている「一等煉瓦レンガ」の繁華な市街へ、馬車を駆りたいとさえ思っていた。そこで私は頭を下げな

がら、喜んで「どうぞ」と相手を促した。

「じゃあすこへ行きましょう。」

子爵の言ことばにつれて我々は、陳列室のまん中に据えてあるベンチへ行つて、一しよに腰を下ろした。室内にはもう一人も人影は見

えなかつた。ただ、周囲には多くの硝子戸ガラスとだな棚が、曇天の冷つめたい光の

中に、古色を帯びた銅版画や浮世絵を寂じやくねん然と懸け並べていた。

本多子爵は杖の銀の握りに頤あごをのせて、しばらくはじつとこの子爵自身の「記憶」のような陳列室を見渡していたが、やがて眼を私の方に転じると、沈んだ声でこう語り出した。

「その友だちと云うのは、三浦直樹みうらなおきと云う男で、私わたしが仏蘭西フランスから帰つて来る船の中で、偶然近づきになつたのです。年は私と同じ

二十五でしたが、あの芳年よしとしの菊五郎のように、色の白い、細ほそお
面もての、長い髪をまん中から割った、いかにも明治初期の文明が
人間になったような紳士でした。それが長い航海の間に、いつと
なく私と懇意になつて、帰朝後も互に一週間とは訪問を絶たやした
事がないくらい、親しい仲になつたのです。

「三浦の親は何でも下谷したやあたりの大地主で、彼が仏蘭西フランスへ渡ると
同時に、二人とも前後して歿なくなつたとか云う事でしたから、そ
の一人息子だつた彼は、当時もう相当な資産家になつていたので
しよう。私が知つてからの彼の生活は、ほんの御役目だけ第×銀
行へ出るほかは、いつも懐ふところ手でをして遊んでいられると云う、
至極結構な身分だつたのです。ですから彼は帰朝すると間もなく、

親の代から住んでいるりようごくひやつほんぐい 両国百本杭の近くの邸宅に、氣の利いた西洋風の書齋を新築して、かなり贅ぜいたく沢な暮しをしていました。

「私はこう云っている中にも、向うの銅板画の一枚を見るように、その部屋の有様がありあり歴々と眼の前へ浮んで来ます。大川に臨んだ仏蘭西窓、縁へりに金を入れた白い天井てんじよう、赤いモロツコ皮の椅子いすや長椅子、壁に懸かかっているナポレオン一世の肖像画、彫刻ほりのある黒檀こくたんの大きな書棚、鏡のついた大理石の煖炉だんろ、それからその上に載っている父親の遺愛の松の盆栽——すべてがある古い新しさを感ぜさせる、陰気なくらいけばけばしい、もう一つ形容すれば、どこか調子の狂った楽器の音ねを思い出させる、やはりあの時

代らしい書齋でした。しかもそう云う周囲の中に、三浦はいつもナポレオン一世の下に陣取りながら、結城揃いか何かの襟を重ねて、ユウゴオのオリアンタルでも読んで居ようと云うのですから、いよいよあすこに並べてある銅板画にでもありそうな光景です。そう云えばあの仏蘭西窓の外を塞いで、時々大きな白帆が通りすぎるのも、何となくもの珍しい心もちで眺めた覚えがありましたつけ。

「三浦は贅沢な暮しをしているといっても、同年輩の青年のよ
うに、新橋とか柳橋とか云う遊里に足を踏み入れる気色も
なく、ただ、毎日この新築の書齋に閉じこもって、銀行家と云う
よりは若隠居にでもふさわしそうな読書三昧に耽っていたので

す。これは勿論一つには、彼の蒲柳ほりゆうの体質が一切いっさいの不摂生を許さなかつたからもありましようが、また一つには彼の性情が、どちらかと云うと唯物的な当時の風潮とは正反対に、人一倍純粋な理想的傾向を帯びていたので、自然と孤独に甘んじるような境涯けいに置かれてしまったのでしよう。實際模範的な開化の紳士だった三浦が、多少彼の時代と色彩を異にしていたのは、この理想的な性情だけで、ここへ来ると彼はむしろ、もう一時代前の政治的夢想家に似通にかよっている所があつたようです。

「その証拠は彼が私と二人で、ある日どこかの芝居でやっている神風連しんぷうれんの狂言きょうげんを見に行つた時の話です。たしか大野鉄平おおのてつぺいの自害の場の幕がしまつた後あとだつたと思ひますが、彼は突然私の

方をふり向くと、『君は彼等に同情が出来るか。』と、真面目な顔をして問いかけました。私は元よりの洋行帰りの一人として、すべて旧弊じみたものが大嫌いだった頃ですから、『いや一向同情は出来ない。』はいとうれい 廃刀令はいとうれいが出たからと云つて、一揆いっきを起すような連中は、自滅する方が当然だと思つている。』と、至極冷淡な返事をしますと、彼は不服そうに首を振つて、『それは彼等の主張は間違つていたかもしれない。しかし彼等がその主張に殉じた態度は、同情以上に価すると思う。』と、云うのです。そこで私がもう一度、『じゃ君は彼等のように、明治の世の中を神代かみよの昔に返そうと云う子供じみた夢のために、二つとない命を捨てても惜しくないと思うのか。』と、笑いながら反問しましたが、彼はや

はり真面目な調子で、『たとい子供じみた夢にしても、信ずる所に殉ずるのだから、僕はそれで本望だ。』と、思い切ったように答えました。その時はこう云う彼の言も、単に一場の口頭語として、深く気にも止めませんでした。今になって思い合わずと、実はもうその言の中に傷しい後年の運命の影が、煙のように這いまわっていたのです。が、それは追々話が進むに従って、自然と御会得が参るでしょう。

「何しろ三浦は何によらず、こう云う態度で押し通していましたから、結婚問題に関しても、『僕は愛のない結婚はしたくはない。』と云う調子で、どんな好い縁談が湧いて来ても、惜しげもなく断ってしまうのです。しかもそのまた彼の愛なるものが、一通

りの恋愛とは事変つて、随ずいぶん分彼の氣に入っているような令嬢が現れても、『どうもまだ僕の心もちには、不純な所があるようだから。』などと云つて、いよいよ結婚と云う所までは中々話が運びません。それが側はたで見えていても、余り齒痒はがゆい氣がするので、時には私も横合いから、『それは何でも君のように、隅から隅まで自分の心もちを点検してかかると云う事になると、行住ぎようじゆうざが坐臥ささえ容易には出来はしない。だからどうせ世の中は理想通りに行かないものだとかきらめて、好いい加減な候補者で満足するさ。』と、世話を焼いた事があるのですが、三浦は反かえつてその度に、憐むような眼で私を眺めながら、『そのくらいなら何もこの年まで、僕は独身で通しはしない。』と、まるで相手にならないのです。

が、友だちはそれで黙っていても、親戚の身になって見ると、元
来病弱な彼ではあるし、万一血統を絶たやしてはと云う心配もなく
はないので、せめて権ごんさい妻さいでも置いたらどうだと勧めすすめた向きもあ
ったそうですが、元よりそんな忠告などに耳を借すような三浦で
はありません。いや、耳を借さない所か、彼はその権ごんさい妻さいと云う
言ことばが大嫌いで、日頃から私をつかまえては、『何しろいくら開化
したと云った所で、まだ日本では妾めかけと云うものが公然と幅を利きか
せているのだから。』と、よく晒わらつてはいたものなのです。です
から帰朝後二三年の間、彼は毎日あのナポレオン一世を相手に、
根気よく読書しているばかりで、いつになったら彼の所いわゆる謂ムウル『愛
のある結婚』をするのだから、とんと私たち友人にも見当のつけよ

うがありませんでした。

「ところがその中に私はある官辺の用向きで、しばらく韓^{かん}国^{こく}京^{けい} いじょう

城^{いじょう}へ赴任^{ふじん}する事になりました。すると向うへ落ち着いてから、

まだ一月と経たない中に、思いもよらず三浦から結婚の通知が届いたじゃありませんか。その時の私の驚きは、大抵御想像がつきましよう。が、驚いたと同時に私は、いよいよ彼にもその愛^{アムウル}の相手が出来たのだなと思うと、さすがに微笑せずにはいられませんでした。通知の文面は極^{ごく}簡単なもので、ただ、藤井勝美^{ふじいかつみ}と云う御用商人の娘と縁談^{ととの}が整ったと云うだけでしたが、その後引続いて受取った手紙によると、彼はある日散歩のついでにふと柳^{やなぎ}島^{しま}の萩^{はぎ}寺^{でら}へ寄った所が、そこへ丁度彼の屋敷へ出入りする骨董^{こっとう}

屋やが藤井の父子おやこと一しよに詣りまい合せたので、つれ立って境内けいだいを歩いてゐる中に、いつか互に見染めみそもし見染められもしたと云う次第なのです。何しろ萩寺と云えば、その頃はまだ仁王門におうもんもわらぶき葺き屋根で、『ぬれて行く人もをかしや雨の萩はぎ』と云う芭蕉ばしやう翁おうの名高い句碑が萩の中に残っている、いかにも風雅な所でしたから、實際才子佳人きんこうの奇遇あつらには誂え向きの舞台だったのに違いありません。しかしあの外出する時は、必ず巴里パリイ仕立ての洋服を着用した、どこまでも開化の紳士を以て任じていた三浦にしては、余り見染め方が紋切型もんきりがたなので、すでに結婚の通知を読んでさえ微笑した私などは、いよいよくすくす撥くられるような心もちを禁ずる事が出来ませんでした。こう云えば勿論縁談の橋渡しには、その骨董

屋のなつたと云う事も、すぐに御推察が参るでしょう。それがまた幸いと、即座に話がまとまつて、表向きの仲人を拵えるが早いか、その秋の中に婚礼も滞りなくすんでしまったのです。ですから夫婦仲の好かつた事は、元より云うまでもないでしょうが、殊に私が可笑しいと同時に妬ましいような気がしたのは、あれほど冷静な学者肌の三浦が、結婚後は近状を報告する手紙の中でもほとんど別人のような快活さを示すようになった事でした。

「その頃の彼の手紙は、今でも私の手もとに保存してありますが、それを一々読み返すと、当時の彼の笑い顔が眼に見えるような心もちがします。三浦は子供のような喜ばしさで、彼の日常生活の細目を根気よく書いてよこしました。今年は朝顔の培養に失

敗した事、上野うえのの養育院の寄附を依頼された事、入梅にゅうばいで書物が大半か黴びてしまった事、抱えかかの車夫が破傷風はしょうふうになった事、都みやこ座やこざの西洋手品を見に行つた事、蔵前くらまえに火事があつた事——一々数え立てていたのでは、とても際限がありませんが、中でも一番嬉しそつだつたのは、彼が五姓ごぜたほうばい田芳梅画伯に依頼して、細君の肖像画しょうざうがを描かいて貰つたと云う一条です。その肖像画は彼が例のナポレオン一世の代りに、書齋の壁へ懸けて置きましたから、私のちも後に見ましたが、何でも束髪そくはつに結ゆつた勝美婦人かつみふじんが毛金けきんぬいとりの繡りのある黒の模様で、薔薇ばらの花束を手にしながら、姿見の前に立つてゐる所を、横顔プロファイルに描いたものでした。が、それは見る事が出来ても、当時の快活な三浦自身は、とうとう永久に見る事が出来

なかつたのです。……」

本多子爵ほんだししやくはこう云つて、かすかな吐息といきを洩しながら、しばらく

くの間口つぐを噤んだ。じつとその話に聞き入つていた私は、子爵が

韓国かんこく京けいじよう城じやうから歸つた時、万一三浦はもう物故ぶつこしていたので

はないかと思つて、我知らず不安の眼を相手の顔に注そそがずにはい

られなかつた。すると子爵は早くもその不安を覺つたと見えて、

おもむろに頭に振りながら、

「しかし何もこう云つたからと云つて、彼が私わたしの留守中るすちゆうに故人

になつたと云う次第しだいじやありません。ただ、かれこれ一年ばかり

経つて、私が再び内地へ歸つて見ると、三浦はやはり落ち着き払

つた、むしろ以前よりは幽鬱ゆううつらしい人間になつていたと云うだ

けです。これは私があの新橋^{しんばし}停車場でわざわざ迎えに出た彼と
久^{きゆう}闊^{かつ}の手を握り合つた時、すでに私には気がついていた事で
した。いや恐らくは気がついたと云うよりも、その冷静すぎるの
が気になつたとしてもいふべきなのでしょう。実際その時私は彼の
顔を見るが早いか、何よりも先に『どうした。体でも悪いのじゃ
ないか。』と尋ね^{たず}たほど、意外な感じに打たれました。が、彼は
反^{かえ}つて私の怪しむのを不審がりながら、彼ばかりでなく彼の細君
も至極健康だと答えるのです。そう云われて見れば、成程一年ば
かりの間に、いくら『愛^{アムウル}のある結婚』をしたからと云つて、急に
彼の性情が変化する筈もないと思いましたが、それぎり私も別
段気にとめないで、『じゃ光線のせいで顔色がよくないように見

えたのだらう』と、笑つて済ませてしまいました。それが追々笑つて済ませなくなるまでには、——この幽鬱な仮面に隠れている彼の煩悶はんもんに感づくまでには、まだおよそ二三箇月の時間が必要だったのです。が、話の順序として、その前に一通り、彼の細君の人物を御話しして置く必要がありますでしょう。

「私が始めて三浦の細君に会つたのは、京城から帰つて間もなく、彼の大川端おおかわばたの屋敷へ招かれて、一夕の饗応きようおうに預つた時の事です。聞けば細君はかれこれ三浦と同年配だったそうですが、小柄でもあつたせい、誰の眼にも二つ三つ若く見えたのに相違ありません。それが眉の濃い、血色鮮あざやかな丸顔で、その晩は古代蝶ようつり鳥の模様か何かに繻珍しゅちんの帯をしめたのが、当時の言を使つ

て形容すれば、いかにも高等な感じを与えていました。が、三浦の愛の相手として、私が想像に描いていた新夫人に比べると、どこかその感じにそぐわない所があるのです。もっともこれはどこかと云うくらいな事で、私自身にもその理由がはつきりとわかっていていた訳じゃありません。殊に私の予想が狂うのは、今度三浦に始めて会った時を始めとして、度々経験した事ですから、勿論その時もただふとそう思っただけで、別段それだから彼の結婚を祝する心が冷却したと云う訳でもなかったのです。それ所か、明いあかる空気洋燈ランテの光を囲んで、しばらく膳に向つてあいだいる間に、彼の細君の澆刺はつらつたる才気は、すっかり私を敬服させてしまいました。俗に打てば響くと云うのは、恐らくあんな応対おうたいの仕振りの事を指

すのでしよう。『奥さん、あなたのような方は実際日本より、仏フランス蘭西にでも御生れになればよかったです。』——とうとう私は真面目まじめな顔をして、こんな事を云う気にさえなりました。すると三浦も盃さかずきを含みながら、『それ見るが好いいい。己おれがいつも云う通りじゃないか。』と、からかうように横よこやり槍を入れましたが、そのからかうような彼の言ことばが、刹那あいだの間私の耳に面白くない響を伝えたのは、果して私の気のせいばかりだったでしようか。いや、この時半ば怨なまめずる如く、斜ななめに彼を見た勝美夫人の眼が、余りに露骨な艶なまめかしさを裏切っているように思われたのは、果して私の邪推ばかりだったでしようか。とにかく私はこの短い応答の間に、彼等二人の平生が稲妻のように閃くのを、感じない訳には行かなか

つたのです。今思えばあれは私にとって、三浦の生涯の悲劇に立ち合った最初の幕開きまくあだったのですが、当時は勿論私にしても、ほんの不安の影ばかりが際きわどく頭を掠かすめたただけで、後はまた元の如く、三浦を相手に賑さかな盃さかずきのやりとりを始めました。ですからその夜は文字通り一夕の歡かんを尽した後で、彼の屋敷を辞した時も、おおかわぼた大川端の川風に俤上びくんの微醺を吹かせながら、やはり私は彼のために、いわゆる所謂『愛のある結婚』に成功した事を何度もひそかに祝したのです。

「ところがそれから一月ばかり経って（元より私はその間も、度々彼等夫婦とは往來ゆききし合っていたのです。）ある日私が友人のあるドクトルに誘われて、丁度於おでんのかなぶみ伝つた仮名書をやっていた新富座しんとみざ

を見物に行きますと、丁度向うの棧敷さしきの中ほどに、三浦の細君が

来ているのを見つけました。その頃私は芝居へ行く時は、必ず眼オ

ペラガラス

鏡オを持って行つたので、勝美夫人もその円まるい硝子ガラスの中に、燃

え立つような掛毛氈かけもうせんを前にして、始めて姿を見せたのです。そ

れが薔薇ばらかと思われる花を束髪そくはつにさして、地味な色の半襟の上

に、白い二重ふたえあご頰なまめかを休めていましたが、私オがその顔に気がつく

同時に、向うも例の艶なまめかしい眼をあげて、軽く目礼を送りました。

そこで私も眼オペラガラス鏡オを下しながら、その目礼に答えますと、三浦

の細君はどうしたのか、また慌えしやくてて私の方へ会釈えしやくを返すじやあ

りませんか。しかもその会釈が、前のそれに比べると、遙うやうやに恭し

いものなのです。私はやっと最初の目礼が私に送られたのではな

かつたと云う事に気がつきましたから、思わず周囲の高土間たかどまを見
 まわして、その挨拶の相手を物色しました。するとすぐ隣の榎ますに
 派手はでな縞の背広を着た若い男がいて、これも勝美夫人の会釈の相
 手をさがす心算つもりだったのでしよう。勻においの高い巻煙草を啣くわえながら、
 じろじろ私たちの方を窺うかがっていたのと、ぴったり視線が出会いま
 した。私はその浅黒い顔に何か不快な特色を見てとつたので、咄と
 嗟つさに眼そを反らせながらまた眼鏡オペラグラスをとり上げて、見るともなく
 向うの棧敷さじきを見ますと、三浦の細君ますのいる榎ますには、もう一人女が
 坐まっているのです。榎山ならやまの女権論者じよけんろんしや——と云つたら、ある
 いは御聞き及びになつた事がないものでもありますまい。当時相
 当な名声のあつた榎山と云う代だい言げん人にんの細君で、盛に男女同権を

主張した、とかく如何いかがわしい風評が絶えた事のない女です。私はその檀山夫人が、黒の紋付の肩を張つて、金縁の眼鏡めがねをかけながら、まるで後見こうけんと云う形で、三浦の細君と並んでいるのを眺めると、何と云う事もなく不吉な予感に脅おびかされずにはいられませんでした。しかもあの女権論者は、骨立つた顔に薄化粧をして、絶えず襟を気にしながら、私たちのいる方へ——と云うよりは恐らく隣の縞の背広の方へ、意味ありげな眼を使っているのです。私はこの芝居見物の一日が、舞台の上の菊五郎きくごろうや左団次さだんじより、三浦の細君と縞の背広と檀山の細君とを注意するのに、より多く費されたと云つたにしても、決して過言じゃありません。それほど私は賑にぎやか下座かげざの囃はやしと桜の釣枝つりえだとの世界にいながら、心は全

然そう云うものと没交渉な、忌^{いま}わしい色彩を帯びた想像に苦しめられていたのです。ですから中^{なか}幕^{まく}がすむと間もなく、あの二人の女^{おんな}連^{なづ}れが向うの棧^{さしき}敷にいなくなつた時、私は實際肩が抜けたようなほつとした心もちを味わいました。勿論女の方はいなくなつても、縞の背広はやはり隣の柵で、しつきりなく巻煙草をふかしながら、時々私の方へ眼をやつていましたが、三^{みつ}の巴の二つがなくなつた今になつては、前ほど私もその浅黒い顔が、氣にならないようになつていたのです。

「と云うと私がひどく邪^{じや}推^{すい}深いように聞えますが、これはその若い男の浅黒い顔だちが、妙に私の反感を買つたからで、どうも私とその男との間には、——あるいは私たちとその男との間には、

始めからある敵意が纏綿てんめんしているような気がしたのです。ですからその後ご一月とたたない中に、あの大川おおかわへ臨んだ三浦の書齋で、彼自身その男を私に紹介してくれた時には、まるで謎なぞでもかけられたような、当惑に近い感情を味わずにはいられませんでした。何でも三浦の話によると、これは彼の細君の従弟いとこだそうでした。当時××紡績会社でも歳の割には重用されている、敏腕の社員だと云う事です。成程そう云えば一つ卓子テエブルの紅茶を囲んで、多曖たわいもない雑談を交換しながら、巻煙草をふかせている間でさえ、彼が相当な才物さいぶつだと云う事はすぐに私にもわかりました。が、何も才物だからと云って、その人間に対する好悪こうおは、勿論変る訳もありません。いや、私は何度となく、すでに細君の従弟だと云う

以上、芝居で挨拶を交すくらいな事は、さらに不思議でも何でもないじゃないかと、こう理性に訴えて、出来るだけその男に接近しようときえ努力して見ました。しかし私がその努力にやっと成功しそうになると、彼は必ず音を立てて紅茶を啜^{すす}つたり、巻煙草の灰を無造作に卓^{むぞうさ}子^{テエブル}の上へ落したり、あるいはまた自分の洒落^{しやれ}を声^{こわだか}高に笑つたり、何かしら不快な事をしでかして、再び私の反感を呼び起してしまうのです。ですから彼が三十分ばかり経つて、会社の宴会とかへ出るために、暇^{いとま}を告げて帰った時には、私は思わず立ち上つて、部屋の中の俗悪な空気を新たにしたい一心から、川に向つた仏蘭西窓^{フランスまど}を一ぱいに大きく開きました。すると三浦は例の通り、薔薇^{ばら}の花束を持った勝美夫人^{かつみ}の額の下に坐りな

がら、『ひどく君はあの男が嫌いじゃないか。』と、たしなめるような声で云うのです。私『どうも虫が好かないのだから仕方がない。あれがまた君の細君の従弟だとは不思議だな。』三浦『不思議——だと云うと?』私『何。あんまり人間の種類が違いすぎるからさ。』三浦はしばらくの間黙つて、もう夕暮の光が漂つてただよいる大川の水面をじつと眺めていましたが、やがて『どうだろう。その中に一つ釣つりにでも出かけて見ては。』と、何の取とつきもない事を云い出しました。が、私は何よりもあの細君の従弟から、話題の離れるのが嬉しかったので、『よかろう。釣なら僕は外交より自信がある。』と、急に元気よく答えますと、三浦も始めて微笑しながら、『外交よりか、じゃ僕は——そうさな、先アムウルず愛より

は自信があるかも知れない。』私『すると君の細君以上の獲物えものがありそうだと云う事になるが。』三浦『そうしたらまた君に羨うらやんで貰うから好いいじゃないか。』私はこう云う三浦の言の底ことばに、何か針の如く私の耳を刺すものがあるのに気がつきました。が、夕暗の中に透すかして見ると、彼は相あいか不わら変ゆ冷やな表情を浮べたまま、仏蘭西窓の外の水の光を根気よく眺めているのです。私『ところで釣にはいつ出かけよう。』三浦『いつでも君の都合つごうの好い時にしてくれ給え。』私『じゃ僕の方から手紙を出す事にしよう。』そこで私は徐おもむろに赤いモロツコ皮の椅子いすを離はなれながら、無言のまま、彼と握手を交して、それからこの秘密臭い薄暮はくぼの書齋を更にうす暗い外の廊下へ、そつと独りで退きました。すると思いがけなく

その戸口には、誰やら黒い人影が、まるで中の容子ようすでも偷み聴ぬすいていたらしく、静たたずに佇たんでいたのです。しかもその人影は、私の姿が見えるや否や、咄嗟とつさに間近く進み寄つて、『あら、もう御帰りになるのでございますか。』と、艶なまめかしい声をかけるじやありませんか。私は息苦しい一瞬の後、今日も薔薇を髪にさした勝美夫かつみ人を冷ひややかに眺めながら、やはり無言のまま会えしやく釈そくをして、々々そうそるま俤いの待たせてある玄関の方へ急ぎました。この時の私の心もちは、私自身さえ意識出来なかつたほど、混乱を極めていたのでしよう。私はただ、私の俤くるまが両国橋りやうごくばしの上を通る時も、絶えず口の中で眩つふやいていたのは、「ダリラ」と云う名だつた事を記憶しているばかりなのです。

「それ以来私は明あきららかに三浦の幽鬱ようすな容子が蔵かくしている秘密ひそみの匂においを感じ出しました。勿論その秘密の匂が、すぐ忌いむべき姦通かんつうの二字を私の心に烙やきつけたのは、御断おことわりするまでもありますまい。が、もしそうだとすれば、なぜまたあの理想家の三浦ともあるものが、離婚を断行しないのでしょうか。姦通の疑惑は抱いていてもその証拠がないからでしょうか。それともあるいは証拠があつても、なお離婚を躊躇するほど、勝美夫人を愛しているからでしょうか。私はこんな臆測を代り代りたくまし遅くしながら、彼と釣りに行く約束があつた事さえ忘れ果てて、かれこれ半月ばかりの間というもの、手紙こそ時には書きましたが、あれほどしばしば訪問した彼の太川端の邸宅にも、足踏さえしなくなつてしまいました。

ところがその半月ばかりが過ぎてから、私はまた偶然にもある予想外な事件に出合ったので、とうとう前約を果しかたがた、彼と差向いになる機会を利用して、直接彼に私の心労を打ち明けようと思ひ立つたのです。

「と云うのはある日の事、私はやはり友人のドクトルと中村座なかむらざを見物した帰り途に、たしか珍竹林主人ちんちくりんとか号していた曙新聞あけぼのでも古顔の記者と一しよになって、日の暮から降り出した雨の中を、当時柳橋やなぎばしにあつた生稻いくいねへ一盞いっさんを傾けに行つたのです。所がその二階座敷で、江戸の昔を偲しのばせるような遠三味線とおじやみせんの音ねを聞きながら、しばらく浅酌せんしやくの趣を楽しんでいると、その中に開化の戯作者げさくしやのような珍竹林主人ちんちくりんが、ふと興に乗つて、折

々輕妙な洒落しやれを交えながら、あの櫛山ならやま夫人の醜聞スカンダルを面白く話して聞かせ始めました。何でも夫人の前身は神戸あたりの洋らしゃ妾めんだと云う事、一時は二遊亭さんゆうてい円暁えんぎようを男妾おとこめかけにしていたと云う事、その頃は夫人の全盛時代で金の指環ばかり六つも嵌はめていたと云う事、それが二三年前まえから不義理な借金で、ほとんど首もまわらないと云う事——珍竹林主人はまだこのほかにも、いろいろ内幕うちまくの不品行を素すつばぬいて聞かせましたが、中でも私の心の上に一番不愉快な影を落したのは、近来はどこかの若い御新造しんぞうが櫛山夫人の腰巾着こしぎんちやくになつて、歩いていると云う風評でした。しかもこの若い御新造は、時々女権論者と一しよに、水す神いじんあたりへ男連れで泊りこむらしいと云うじやありませんか。

私はこれを聞いた時には、陽気なるべき猷けん酬しゆうの間でさえ、もの思わしげな三浦の姿が執しゆう念ねく眼の前へちらついで、義理にも賑やかな笑い声は立てられなくなつてしまいました。が、幸いとドクトルは、早くも私のふさいでいるのに気がついたものと見えて、巧に相手を操あやつりながら、いつか話題を檜山夫人とは全く縁のない方面へ持つて行つてくれましたから、私はやつと息をついて、ともかく一座の興を殺そがない程度に、応対を続ける事が出来たのです。しかしその晩は私にとつて、どこまでも運悪く出来上つていたのでしよう。女権論者の噂に気を腐らした私が、やがて二人と一しよに席を立つて、生いく稻いねの玄関から帰りの俣へ乗ろうとしていると、急に一台の相乗俣あいのりぐるまが幌ほろを雨に光らせながら、勢い

よくそこへ曳ひきこみました。しかも私が俵くるまの上へ靴の片足を踏みかけたのと、向うの俵が桐油とうゆを下して、中の一人が沓脱くつぬぎへ勢よく飛んで下りたのが、ほとんど同時だったのです。私はその姿を見るが早いか、素早く幌の下へ身を投じて、車夫が梶かじ棒ぼうを上げる刹那の間も、異様な興奮に動かされながら、『あいつだ。』と眩つぶやかずにはいられませんでした。あいつと云うのは別人でもない、三浦の細君の従弟と称する、あの色の浅黒い縞の背広だったのです。ですから私は雨の脚を俵の幌に弾はじきながら、燈火の多いひろ小路こうじの往来を飛ぶように走って行く間も、あの相乗俵あいのりぐるまの中に乗っていた、もう一人の人物を想像して、何度となく恐しい不安の念に脅おびやかされました。あれは一体檜山夫人でしたらうか。

あるいはまた束髪に薔薇ばらの花をさした勝美夫人だったでしょうか。私は独りこのどちらともつかない疑惑に悩まされながら、むしろその疑惑の晴れる事を恐れて、倉皇そうこうと俤えいに身を隠した私自身の臆病な心もちが、腹立たしく思われてなりませんでした。このもう一人の人物が果して三浦の細君だったか、それとも女権論者だったかは、今になってもなお私には解く事の出来ない謎なのです。

本多子爵ほんだししやくはどこからか、大きな絹の手巾ハンケチを出して、つましく鼻をかみながら、もう暮色を帯び出した陳列室の中を見廻して、静にまた話を続け始めた。

「もつともこの問題はいずれにせよ、とにかく珍竹林ちんちくりん主人から

聞いた話だけは、三浦の身にとつて三考にも四考にも価する事ですから、私はその翌日すぐに手紙をやつて、保養がてら約束の釣つりに出たいと思う日を知らせました。するとすぐに折り返して、三浦から返事が届きましたが、見るとその日は丁度じゆうろくや十六夜だから、釣よりも月見かたがた旁、日の暮から大川へ舟を出そうと云うのです。勿論私にしても格別釣に執着があつた訳でもありませんから、早速彼の発議ほつきぎに同意して、当日は兼ねての約束通り柳橋の舟ふなやど宿で落合つてから、まだ月の出ない中に、猪牙舟ちよきぶねで大川へ漕ぎ出しました。

「あの頃のおおかわ大川の夕景色は、たとい昔の風流には及ばなかつたかも知れませんが、それでもなお、どこか浮世絵じみた美しさが

残っていたものです。現にその日も万八まんぱちの下を大川筋へ出て見ますと、大きく墨をなすつたような両国橋の欄干らんかんが、仲秋のかすかな夕明りを揺かゆらめしている川波の空に、一反り反ひとそつた一文字を黒々とひき渡して、その上を通る車馬の影が、早くも水すい靄あいにぼやけた中には、目まぐるしく行き交う提灯ちようちんばかりが、もう鬼おづき灯ほどの小ささに点々と赤く動いていました。三浦『どうだ、この景色は。』私『そうさな、こればかりはいくら見たいと云つたつて、西洋じゃとても見られない景色かも知れない。』三浦『すると君は景色なら、少しくらい旧弊きゆうへいでも差支えないと云う訳か。』私『まあ、景色だけは負けて置こう。』三浦『所が僕はまた近頃になって、すっかり開化なるものがいやになってしま

った。』私『何んでも旧幕の修好使しゅうこうしがヴルヴアルを歩いているのを見て、あの口の悪いメリメと云うやつは、側にいたデユマか誰かに「おい、誰が一体日本人をあんな途方もなく長い刀とぼうに縛りしばつけたのだろう。」と云ったそうだけ。君なんぞは気をつけないと、すぐにメリメの毒舌でこき下おろされる仲間らしいな。』三浦『いや、それよりもこんな話がある。いつか使に来た何如璋かじよしょうと云う支那人は、横浜の宿屋へ泊って日本人の夜着を見た時に、
「是古こいにしえの寝衣しんいなるもの、此このくに邦かしゅうに夏周いせいの遺制いせいあるなり。」とか何とか、感心したと云うじゃないか。だから何も旧弊だからって、一概には莫迦ばかに出来ない。』その中に上げ汐しおの川面かわもが、急に闇を加えたのに驚いて、ふとあたりを見まわすと、いつの間にか我々

を乗せた猪牙舟ちよぎぶねは、一段と櫓ろの音を早めながら、今ではもう兩國橋を後にして、夜目にも黒い首尾しゅびの松まつの前へ、さしかかろうとしているのです。そこで私は一刻も早く、勝美夫人かつみの問題へ話題を進めようと思いましたが、早速三浦の言ことば尻じりをつかまえて、『そんなに君が旧弊好きなら、あの開化な細君はどうするのだ。』と、探りさぐの錘おもりを投げこみました。すると三浦はしばらくの間、私の問が聞えないように、まだ月代つきしろもしない御竹倉おたけぐらの空をじつと眺めていましたが、やがてその眼を私の顔に据えると、低いながらも力のある声で、『どうもしない。一週間ばかり前に離縁をした。』と、きつぱりと答えたじやありませんか。私はこの意外な答に狼狽ろうばいして、思わず舷ふなばたをつかみながら、『じゃ君も知って

いたのか。』と、際きわどい声で尋たずねました。三浦は依然として静な調子で、『君こそ万事を知っていたのか。』と念を押すように問い返すのです。私『万事かどうかは知らないが、君の細君とならや榎山ま夫人との関係だけは聞いていた。』三浦『じゃ、僕の妻と妻の従弟との関係は？』私『それも薄々推察していた。』三浦『それじゃ僕はもう何も云う必要はない筈だ。』私『しかし——しかし君はいつからそんな関係に気がついたのだ？』三浦『妻と妻の従弟とのか？』それは結婚して三月ほど経ってから——丁度あの妻の肖像画を、五姓ごせた田芳梅画伯ほうばいに依頼して描かいて貰う前の事だった。』この答が私にとって、さらにまた意外だったのは、大抵たいてい御想像がつくでしょう。私『どうして君はまた、今日こんにちまでそん

な事を黙認していたのだ？』三浦『黙認していたのじゃない。僕は肯定こうていしてやっていたのだ。』私は三度意外な答に驚かされて、しばらくはただ茫然と彼の顔を見つめていると、三浦は少しも迫らない容子ようすで、『それは勿論妻と妻の従弟との現在の関係を肯定した訳じゃない。当時の僕が想像に描いていた彼等の関係を肯定してやったのだ。君は僕が「愛アムウルのある結婚」を主張していたのを覚えているだろう。あれは僕が僕の利己心を満足させたいための主張じゃない。僕は愛アムウルをすべての上に置いた結果だったのだ。だから僕は結婚後、僕等の間の愛情が純粹なものでない事を覚った時、一方僕の軽拳を後悔すると同時に、そう云う僕と同棲どうせいしなければならぬ妻も気の毒に感じたのだ。僕は君も知っている通

り、元来体も壮健じやない。その上僕は妻を愛そうと思つていても、妻の方ではどうしても僕を愛す事が出来ないのだ、いやこれも事によると、抑僕アムウルの愛なるものが、相手にそれだけの熱を起させ得ないほど、貧弱なものだったかも知れない。だからもし妻と妻の従弟いとことの間に、僕と妻との間よりもつと純粹な愛情があつたら、僕は潔くいさぎよ幼馴染おさななじみの彼等のために犠牲ぎせいになつてやる考だつた。そうしなければ愛をすべての上に置く僕の主張が、事実においてすた廃つてしまふ。實際あの妻の肖像画も万一そうなつた暁に、妻の身代りとして僕の書齋に残して置く心算つもりだつたのだ。『三浦はこう云いながら、また眼を向う河岸がしの空へ送りました。が、空はまるで黒幕でも垂らしたように、椎しいの樹松きまつうら浦の屋敷の上へ陰々と

蔽いかかったまま、月の出らしい雲のけはいは未いまだに少しも見えませんでした。私は巻煙草に火をつけた後で、『それから？』と相手を促しました。三浦『所が僕はそれから間もなく、妻の従弟の愛アムウル情が不純な事を発見したのだ。露骨に云えばあの男と櫛山夫人との間にも、情交のある事を発見したのだ。どうして発見したかと云うような事は、君も格別聞きたくはなからうし、僕も今更話したいとは思わない。が、とにかくある極めて偶然な機会から、僕自身彼等の密会する所を見たと言う事だけ云って置こう。』私は巻煙草の灰を舷ふなばたの外に落しながら、あの生いくいね稲の夜の記憶を、まざまざと心に描き出しました。が、三浦は澱よどみなく言ことばを継いで、『これが僕にとっては、正に第一の打撃だった。僕は彼等

の關係を肯定してやる根拠の一半を失つたのだから、勢い、前のような好意のある眼で、彼等の情事を見る事が出来なくなつてしまつたのだ。これは確か、君が朝ちようせん鮮から歸つて來た頃の事だつたろう。あの頃の僕は、いかにして妻の従弟から妻を引き離そうかと云う問題に、毎日頭を悩ましていた。あの男の愛アムウルに虚偽きよぎがあつても、妻のそれは純粹なのに違いない。——こう信じていた僕は、同時にまた妻自身の幸福のためにも、彼等の關係に交渉する必要があると信じていたのだ。が、彼等は——少くとも妻は、僕のこう云う素振そぶりに感づくくと、僕が今まで彼等の關係を知らずについて、その頃やつと気がついたものだから、嫉妬しつとに驅られ出したとでも解釈してしまつたらしい。従つて僕の妻は、それ以來僕

に對して、敵意のある監視を加え始めた。いや、事によると時々
は、君にさえ僕と同様の警戒を施していたかも知れない。』私
『そう云えば、いつか君の細君は、書齋で我々が話しているのを
立ち聴きをしていた事があつた。』三浦『そうだろう、ずいぶん
そのくらいな振ふる舞まいはし兼ねない女だつた。』私たちはしばらく
口を噤つぐんで、暗い川面かわもを眺めました。この時もう我々の猪牙舟ちよきぶね
は、元の御厩橋おうまやばしの下をくぐりぬけて、かすかな舟脚ふなあしを夜の水
に残しながら、彼かれ是これ駒形こまかたの並木近くへさしかかつていたので
す。その中にまた三浦が、沈んだ声で云いますには、『が、僕は
まだ妻の誠実を疑わなかつた。だから僕の心もちが妻に通じない
点で、——通じない所か、むしろ憎悪を買っている点で、それだ

け余計に僕は煩悶はんもんした。君を新橋に出迎えて以来、とうとう今日きょうに至るまで、僕は始終この煩悶と闘わなければならなかったのだ。が、一週間ばかり前に、下女か何かの過失から、妻の手にはいる可き郵便が、僕の書斎へ来ているじゃないか。僕はすぐ妻の従弟の事を考えた。そうして——とうとうその手紙を開いて見た。すると、その手紙は思いもよらないほかの男から妻へ宛てた艶えんし書よだったのだ。言い換えれば、あの男に対する妻の愛情も、やはり純粹なものじゃなかったのだ。勿論この第二の打撃は、第一のそれよりも遙はるかに恐しい力を以て、あらゆる僕の理想を粉碎した。が、それと同時にまた、僕の責任が急に軽くなったような、悲しむべき安慰あんいの感情を味った事もまた事実だった。』三浦がこう語

り終つた時、丁度向う河岸がしの並倉なみぐらの上には、もの凄こわいように赤じゆうろくやい十六夜の月が、始めて大きく上り始めました。私はさつきあの芳年よしとしの浮世絵を見て、洋服を着た菊五郎から三浦の事を思い出したのは、殊にその赤い月が、あの芝居ひいの火入りの月に似ていたからの事だったので。あの色の白い、細ほそおもて面の、長い髪をまん中から割つた三浦は、こう云う月の出を眺めながら、急に長い息いきを吐くと、さびしい微笑を帯びた声で、『君は昔、神風連しんふうれんが命を賭として争つたのも子供の夢だとけなした事がある。じゃ君の眼から見れば、僕の結婚生活なども——』私『そうだ。やはり子供の夢だったかも知れない。が、今日こんにち我々の目標もくひょうにしている開化も、百年ひゃくねんの後のちになつて見たら、やはり同じ子供の夢だろうじ

やないか。……」

丁度本多子爵ほんだししやくがここまで語り続けた時、我々はいつか側へ来た守衛しゅえいの口から、閉館の時刻がすでに迫っていると云う事を伝えられた。子爵しやくと私わたくしとは徐おもむろに立上つて、もう一度周囲の浮世絵と銅版画とを見渡してから、そつとこのうす暗い陳列室の外へ出た。まるで我々自身も、あの硝子戸棚ガラスとだなから浮び出た過去の幽霊か何かのように。

(大正八年一月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月23日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

開化の良人

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>